

眼病の祈り

木積を歩く

「苦しいときの神頼み」ということわざがあるように、現代のように医学がまだそれほど進歩していなかった時代には、神仏への祈りが盛んでした。

眼病に靈験があると伝わるのは、大寺（豊和地区）龍尾寺の「弘法大師手堀りの井戸」、今は廃寺となっている松山（匠瑳地区）正明院の「目の仏様」と呼ばれた薬師如来などが挙げられます。

今回紹介する「日朝さま」は日蓮宗の僧侶で、「眼病平

癒」の信仰を集め、木積（豊栄地区）圓實寺境内に「南無日朝大聖人」と刻まれた石塔としてまつられています。

圓實寺は、飯高檀林35世化主（檀林長）日宣が1680年頃に開いたとされ、木積村生まれの日顕は日宣の弟子となり池上（東京都大田区）檀林で学びました。後に飯高檀林で学んだ日顕は学徳に優れ、同58世化主を務め、野手（野田地区）朗生寺に石塔を建てています。

日朝供養塔は1793（寛



圓實寺境内にある日朝供養塔。「眼病守護の僧」と呼ばれた日朝をまつる

政5）年2月25日、当時の住職が近隣村々の信者を集めお経をあげ石塔を建てました。信者は八日市場村をはじめ吉田、飯塚、内山、現在の多古町域の飯笹、林、横芝光町域の笹本（篠本）、荒井（新井）村など14か村に及びました。日朝は身延山久遠寺11世で、身延中興の祖とされます。61歳の時に両眼失明の危険にさらされたものの、お経の力で回復されたことから「眼病守護の僧」と呼ばれました。

圓實寺にはこのほか「安産守護」の七面堂、1789（寛政元）年に疱瘡神の講中が立てた「妙正大明神」などがまつられています。珍しいものでは、「痔守尊天 穉山自雲」という痔病に苦しむ人が祈った靈神があります。

境内にツツジの大木があり、見事な花を咲かせる5月のふじ祭のころは一時のにぎわいを見せます。

ひっそりとした境内は、日蓮宗の高僧を生んだ土地にふさわしく、小規模な寺院ながらその雰囲気を感じさせています。

（市文化財審議会委員・

依知川雅一）

関秘書課広報広聴班

☎73・0080